銀河団における粒子加速と 最高エネルギー宇宙線

宇宙線研究所 西脇公祐

背景: 貯蔵庫モデルと背景ニュートリノ









銀河団の広がった電波放射

~ 再加速モデル vs 2次電子モデル~

銀河団の非熱的電波放射 (100 MHz – 5 GHz)



slow-diffusion problem

= 電波ハロー大きすぎ問題



宇宙線の拡散や銀河団の動的タイムスケールに比べ、電子の放射冷却が早すぎる

radio bimodality



電波ハローは銀河団同士の衝突に起因?

再加速モデル v.s. 2次電子モデル

x 1

•





- 乱流による"種電子"の加速で説明
- 銀河団ガスには乱流がある(X線観測、 シミュレーション)
- 陽子は必ずしも必要ではない

Schlikeiser+1987 Brunetti+2001, Petrosian+2001, Fujita+2007, etc...

pp衝突による2次電子生成で説明 • 銀河団が"貯蔵庫"であることから 当然期待される ガンマ線・ニュートリノの放射を 伴う

Dennison 1980, Blasi & Colafrancesco 1999, Dolag & Ensslin 2000, Miniati+2001, etc...

再加速モデル v.s. 2 次電子モデル



- 乱流による"種電子"の加速で説明
- 銀河団ガスには乱流がある(X線観測、 シミュレーション)
- 陽子は必ずしも必要ではない

Schlikeiser+1987 Brunetti+2001, Petrosian+2001, Fujita+2007, etc...

- Slow-diffusion problem
 - 銀河団を満たす乱流による "その場" (in-situ)加速

Radio bimodality

衝突による乱流励起

予言

- 再加速の効率に応じてcut-offした ⁻ スペクトル) USSRH

merger

radio halo

乱流観測による検証

再加速モデル v.s. 2次電子モデル

トノ

p p

•

Slow-diffusion problem

宇宙線陽子の拡散 ($E_p \gtrsim 100$ GeV) 降着衝撃波での加速、銀河団辺縁からの注入

Radio bimodality

バニラモデルでは説明できない ただし、衝突による拡散係数の変化 などで説明できる可能性あり。

・ <u>予言</u>

ガンマ線やニュートリノの放射 ただし、現行の観測機で検出は困難 2次電子モデル

pp衝突による 2 次電子生成で説明

- 銀河団が"貯蔵庫"であることから
 当然期待される
 - ガンマ線・ニュートリノの放射を 伴う

Dennison 1980, Blasi & Colafrancesco 1999, Dolag & Ensslin 2000, Miniati+2001, etc...



Comaなど、ごく一部の銀河団で2次電子モデルが否定された



hadronicモデルでは、非熱的エネルギー密度が熱的成分より大きくなってしまう

Comaからのガンマ線検出(?)



再加速モデル v.s. 2次電子モデル



再加速モデルに軍配が上がりつつある。しかし議論は尽きない



- 銀河団の電波放射の起源は長らく議論されてきた
- ・銀河団衝突との相関やガンマ線の未検出から、乱流再加速モデルが有力になりつつ ある
- "再加速が有力"の主張には、しばしばバイアスがかかっており、Coma以外のハロー に関しては根拠が不足していることが多い
- 1次宇宙線の起源が未解決。AGNジェットなのか、銀河風なのか、衝撃波なのか
- ・ 銀河団の宇宙線描像が確立すれば、大規模構造(フィラメント)中の宇宙線分布も概ね
 予想がつく?

宇宙線陽子の行方?

~再加速モデルの定量的な議論~







銀河団にある"はず"の宇宙線陽子 宇宙線エネルギー密度の概算 $\varepsilon_{CRp} \sim 10^{-12} \text{ erg/cc} \left(\frac{L_{CRp}}{10^{44} erg \ s^{-1}} \right) \left(\frac{t_{age}}{10 Gyr} \right) \left(\frac{V_{cl}}{10 \ Mpc^3} \right)^{-1}$ ECRP ~ 0.03 − 0.1 ← 楽観的なhadronicモデルで期待されるCR陽子エネルギー密度 \mathcal{E}_{th}

従来の再加速モデルは、(最大で)熱エネルギーの1~10%もある 宇宙線陽子を無視してる!

再加速モデルへの要請:電波放射の寿命



再加速は銀河団の動的時間くらい継続



再加速モデルのミクロな描像

Transit-time damping (TTD)

[e.g., Stix 1992, Barns 1968, Brunetti & Lazarian 2007]



- MHD fast modeと粒子の共鳴
- $\omega k_{\parallel} v_{\parallel} = 0$
- magnetic mirror force
- 圧縮性乱流が熱的電子のTDDで減衰

Stochastic acceleration at turbulent reconnection/dynamo

[e.g., Brunetti & Lazarian 2016]



 $t_{acc} \approx 300 \text{ Myr} \left(\frac{M_s}{0.5}\right)^{-3} \left(\frac{\psi_{mfp}}{0.5}\right)^3 \left(\frac{L}{300 \text{ kpc}}\right) \left(\frac{c_s}{1500 \text{ kms}^{-1}}\right)^{-2} \left(\frac{\beta_{pl}}{100}\right)^{-\frac{1}{2}}$

 乱流ダイナモに伴って起こる粒子加速
 Alfvenスケールの構造に散乱される2次 Fermi加速
 非圧縮性乱流との相互作用

 $t_{acc} \approx 300 \text{ Myr}$ を自然に説明できるモデルが(複数)ある



再加速で高エネルギーの宇宙線陽子を作れる可能性がある



"つきっぱなし"モデルと"すぐ消える"モデルどっちが正しい?





モデルパラメータ

	parameter	symbol	fixed value	
Magnetic field	Central field strength (Eq. (2.205))	B_0	$5\mu G$	
	Index of the radial profile	η_B	0.5	
Turbulence	Outer (injection) scale of the turbulence	L	$0.5 R_{500}$ -	
	Radial profile of turbulence (Eq. (4.18))	Tab. 4.2	-	
	Energy fraction of the compressible mode:		-	衝突前のrelaxed状態でも再加速
	in merging state	$f_{ m comp}^{ m mer}$	_ 0.9 =	を考える
	in relaxed state	$f_{ m comp}^{ m rel}$	-0.1- 0.9	< (ただし衝突によって乱流は増幅)
	Threshold mass ratio for the re-acceleration	$\xi_{ m th}$	-	
	Duration of the post-merger state	$T_{ m dur}$	_ =	
CR injection	Minimum momentum of primary CRP	p_{\min}^{inj}	-0.1-	
	<u>Primary electron to proton ratio</u>	$-f_{ep}$	-	
	Spectral index	$lpha_{ m inj}$	-	── 陽子と電子の注入率を独立に
	Shock acceleration efficiency	$\eta_{ m acc}$	-	指定
	AGN CR injection luminosity	$L_{ m CR}^{ m AGN}$	-	$L_{CRE} (M_{500}, z), \ L_{CRP} (M_{500}, z)$
Normalization	Redshift of the onset of re-acceleration	$z_{ m on}$		
(Coma)	Merger mass ratio	$\xi_{ m Coma}$	0.6	

磁場と乱流の1次元モデル

magnetic field

profile seen in Faraday RM obs. and MHD simulation [Bonafede+2010 ,Vazza+, Steinwandel+]

turbulence











期待されるガンマ線: CR陽子あり



期待されるニュートリノ: CR陽子あり



注入率: $L_{CRp} = 10^{41} \text{ erg/s}$ Planck-SZカタログに対するIceCube muon event のstacking analysisから得られた上限値(青色)と 整合的 1. 近傍の大質量銀河団はニュートリ ノ背景放射の主な起源にならない 2. ニュートリノ上限から $L_{CRp} > 10^{42} \text{ erg/s}$ のモデルを棄却 (given B, t_{acc}, T_{dur}) 将来観測で上限がさらに厳しくなれば、 陽子注入率や磁場をさらに制限できる

単純な再加速モデルの困難

宇宙線注入率が小さすぎる!

minimum mass ratio of RHclusters [Cassano+2016]

	L _{CRe} [erg/s]	L _{CRp} [erg/s]	γ _{min} (electron)	ξth	T_{dur}/t_{eddy}
CR陽子なし	10 ⁴¹	0	10 ³	0.2	4.0
CR陽子あり	10^{41}	10^{41}	10 ³	0.2	4.0

≪ 10⁴⁴ erg/s
(星形成率や、衝撃波のkinetic energyから)

期待される値)

 $\gamma_{min} = 10^2 - 10^3$ in observations and simulations of radio galaxies [Carilli+,Turner+,Hardcastle+,Ohmura+]

~ 3-4 Gyrs since merger

乱流や磁場分布の"ムラ"により有効体積が小さい? or 銀河からの宇宙線供給や衝撃波加速の効率が悪い?



まとめ2:再加速モデルとCR陽子

- 再加速モデルで電波ハローの発生を再現
- 「銀河団衝突のモンテカルロ計算」「運動量1次元+空間1次元 FP」
- 電波に寄与する2次電子(10GeV)、IceCubeニュートリノ(PeV)、それぞれの起源となるCR 陽子のエネルギーは5桁以上の差がある。
- 広いエネルギー幅でCR陽子がどのようなスペクトルになっているかは極めて非自明
- ・ 電波で規格化したモデル → 銀河団はニュートリノ背景放射の起源にならない
- *T_{dur}* ≥ 10 *t_{acc}* が必要となるため、もしCR陽子が同じメカニズムで再加速されていれば、そのスペクトルはハードになる → TeV -PeVのガンマ線・ニュートリノ放射?

再加速モデルでは、陽子の注入が抑えられてなければならない。 非一様な再加速? 降着衝撃波は粒子加速できない?

最高エネルギー宇宙線の起源 になりうるか



高エネルギー宇宙線のone-zoneモデル

дп_{source}

 ∂r

Expansion

Photopair, p

Photopair.

Fe

10²¹

10²²

-Analytic

Photopion,

Fe

diffuse escape flux

 $F_{CR} = -D_{rr} - D_{rr}$

Numerical

Total. p

Photopion,

10¹⁹

CMBRz = 0

energy-loss

scattering

Photodisintegration, Fe

10²⁰

Energy (eV)

Path (Mpc)

Photohadronic 101

Free

 $r = R_{200}$

簡単のため陽子のみ考える



n: comoving number density of CRp

cooling process:

- BH loss
- photo-meson loss
- adiabatic loss

Injection (escape) spectrum





再加速モデルでは、UHECRを加速できないが、 ~1EeV宇宙線までは作れる?

全体のまとめ

- 究極目標 (学部生でもわかる目標) ... 宇宙線起源の解明、ダークマターの正体
- 銀河団は宇宙論と宇宙物理の両方で面白い
- 電波放射の起源 … 「再加速モデル」vs「2次電子モデル」の論争が長年続い ている
- 衝突との相関、急峻なスペクトル、メガハローの存在など、再加速モデルに 有利な証拠が揃ってきている
- しかし、再加速モデルでは宇宙線陽子の注入を抑えなければならない
- パッチーな乱流、hard-sphereではない加速メカニズム、multi-phaseなガス降着 による衝撃波加速の抑制、などなど、まだ研究されてないテーマに関連
- たぶん電波ハローは「電波銀河のおまけ」みたいな放射



テスト計算: power-law injection

 $N_p \propto \gamma^{-2}$

